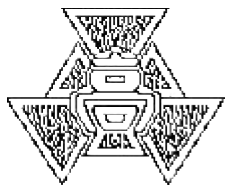


令和元年度

研修集録

《第27号》



秋田県立十和田高等学校

変わっていかなければいけない授業と考查問題

校長 佐藤 久男

令和2年1月に放送されたNHKのプロフェッショナルは神奈川県私立栄光学院（中高一貫の超進学男子校）に勤務する数学教師の井本陽久（はるひさ）先生についての番組であった。ある日の中学校2年生のクラスの授業で井本先生は黒板に2個の円と1本の直線を書き、この3つに接する円は何通りの書き方がありますかと生徒に問うた。生徒たちは考えはじめ、ある程度の考えがまとまると近くの生徒と考えを言い合ったりし始めた。自分が思いもつかなかった友人の考え方に生徒は興奮し、他のパターンはないのか話し合うなど教室の中は混とんとし、自然発生的にいくつかのグループとなり、又はならなかったりしながら、自分の考えを出し合っていた。こうなると先生の出番はないが、どの生徒も真剣に考えていた。井本先生は、自分は授業では教えない、教えてしまうと生徒が自分で考えない、注目しているのは生徒が今考えているかであり、試行錯誤しているかであるという。先生は教える人ではなく一緒に考える人だと言う。教えることによって生徒を正解を考える人に育てるのではなく、未知の問題を与え、試行錯誤をさせることで問題を考える力や問題に立ち向かう態度を育てるのだという。

私は理科の教員だが、自分が今までに行ってきた授業では生徒たちは考えていたであろうかと振り返った。そういう時間もあったと思うが、いかに多くの生徒が深く考えていたか、さらにはこの授業のように活発な考え合いなどが見られたかどうかと考えると自信がない。放課後補習などでは考える時間もあったと思うが、日頃の授業ではおもに知識の習得や現象の理解などに終始してしまっていた。私は考えさせる授業をしていなかった。

社会構造の変化に伴い、学校教育に求められる内容も変化してきている。令和4年度から実施される新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びをすることで、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける人間を育てることを目標としている。求められる能力や態度が変わることにより、授業も変わり、それに伴い考查問題も変わっていかなければいけない。理科であれば知識問題は減少し、グラフや表の読み取りや複数の資料から言えることを答えるなどの思考問題が増加していく。また、ある自然現象が生じた理由の仮説を立てさせたり、その検証方法を答えさせるなどの問題が考えられる。本校の考查問題を見るとまだまだ一問一答式や穴埋め問題などの知識を問う問題が多い。どのような力をつけさせるためにどのような授業をするのか、そしてその力を評価するためにどのような考查問題を出題するのか、しっかりと考え、準備していかなければならない。

令和元年度十和田高校 研修集録＜第27号＞

目次

巻頭言

校長 佐藤 久男

1. 校外研修

教育センターA講座

「高等学校実践的指導力習得研修講座 A-10」	神 居 恵 悟	1
「教職5年目研修講座 A-17」	寺 田 尚 志	2
「高等学校新任生徒指導主事研修講座 A-46」	渡 邊 一 郎	5
「養護教諭（臨時）研修講座A A-53」	塚 本 琴 美	7

教育センターB講座

「各教科等の指導における言語活動の充実 B-1」	佐 藤 裕 也	8
「高等学校保健体育科授業の充実 B-6」	石 井 智 子	9
「高等学校家庭科授業の充実 B-8」	今 川 浩 子	10

教育センターC講座

「JTE English Workshop C-16」	木 村 由 美	11
「アセスメントの方法と実際 C-29」	木 村 由 美	12

2. 校内研修

公開授業研究会

学習指導案（地理A）	柴 田 果 織	13
配布資料	柴 田 果 織	15
研究協議Ⅰ		20
研究協議Ⅱ・全体会		23

ふるさと教育 学習指導案

国 語 科	齊 藤 恭 子	26
地理歴史科	柴 田 果 織	27
数 学 科	飯 塚・寺 田	28
保健体育科	石 井 智 子	29
芸 術 科	中 山 薫	30
外国語 科	土 門 祐 子	31
家 庭 科	今 川 浩 子	32
商 業 科	工 藤 由紀子	33

編集後記

実践的指導力習得研修講座（高等学校3年目）

教 諭 神居 恵悟

【研修の目標】学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

【期 日】Ⅰ期…令和元年6月7日（金）、Ⅱ期…令和元年9月3日（火）

【会 場】秋田県総合教育センター

【日 程】Ⅰ期…「保護者対応と連携」（講義・演習）

「学校組織の一員として－学校教育目標とホームルーム経営－」（講義・演習）

「単元（題材）及び単位時間の授業構想と実践①」（講義・協議・演習）

Ⅱ期…「単元（題材）及び単位時間の授業構想と実践①」（演習・協議）

【受講内容】

Ⅰ期

「保護者対応と連携」では、秋田県総合教育センター指導主事の赤坂亨先生より、ロールプレイを交えた講義による研修をして頂いた。「学校組織の一員として－学級教育目標とホームルーム経営－」では、同指導主事、森川剛先生による組織マネジメントの講義から、あきたキャリアアップシートを活用した演習までを行った。「単元（題材）及び単位時間の授業構想と実践①」では各教科ごとの教室に分かれ、2期の模擬授業研修に向けた活動を行った。その際、萩原亨指導主事より、Akitaractive Eyeを活用した授業づくりの方法と要点についての指導を頂いた。ねらいと評価の一体化により、ねらいから評価までの整合性を高めていくことを念頭に置き、授業を受ける生徒が、育成すべき資質・能力を身に付けることができるよう適切な手立てを講じる力を継続的に高めていくことの大切さを学んだ。

Ⅱ期

各科目の先生方とお互いに教師役、生徒役を交代しながら模擬授業を行った。自分の授業を見てもらうこと、また、他教科の先生方の授業を受けながら考えていくことで、ここまでの研修・実践の成果とこれからの課題を発見するための非常に有効な機会となった。授業を立案、計画し、実際に行う中で、生徒から予想外の発想・発言が出てくることがある。実際に今回の模擬授業の中で、生徒役の先生から予想外の発言があり、その内容が新しい視点に立ったものであった。今回の模擬授業ではその意見を生かしきることができなかったが、学びを深めるためにその後の授業の予定を急遽変更してでも発言を拡げていくことが大切だと言うことを学び、実践できるよう経験を積みたいと感じた。協議の中でも、1年目、2年目とはまた違った視点で授業について考えられるようになったと感じ、他教科の先生方との意見交換はとても貴重なものであった。

【まとめ】

これまでの教員生活で得ることができたものと直近の課題を強く認識出来る研修となった。改めて、自分自身が学び続けることで生徒の成長の可能性を広げられるのだということを感じることができた。今後も日々学習と成長の機会を逃さず、少しずつでも前進していけるよう精進したい。今回の研修で御指導頂いた先生方、本当にありがとうございました。

教職5年目研修講座

教 諭 寺田 尚志

【はじめに】

教職5年目研修講座はⅠ期とⅡ期の2回、次の「研修の目標」に則ってさまざまな講義や演習が行われた。その中の授業改善①と②では、事前に与えられたテーマについて各自が作成したレポートをもとに協議を行った。今回は、その授業改善の取り組みを紹介したい。

【研修の目標】

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る。

【Ⅰ期内容】6月14日（金） ○生徒理解と人間関係づくり（講義・演習）
○学校組織の一員として ―マネジメントの視点―（講義・演習）
○生徒の実態を踏まえた授業改善①（講義・協議・演習）

【事前レポート：自校の生徒の実態】

1年生

一般選抜学力検査からは、得点率について、大問1（6）2次方程式を解く問題は全県で55.9%、本校2.7%と本校が大きく下回っている。（14）正四角錐の体積を求める問題は全県41.6%、本校2.7%となり大きく下回っている。また関数分野の問題全体の得点率が全県に比べて大きく下回っている。

また、入学後間もなく実施した課題テストにおいて、数学では毎年同じ問題で実施して過年度比較できるようにしている。前年度に比べて得点率が大きく下回る項目は、分数の加減、 $\sqrt{\quad}$ の計算、文字式の加減、方程式となっている。

2年生

学習状況調査から「高校卒業後の進路達成に向けて最も役立つと感じているものは」という問いに対して、「毎日の授業」と答えた生徒の割合が県全体で61.4%であるのに対して、本校生徒の割合は41.3%と大きく下回っている。また学習時間の質問に対して、平日学校の授業以外で「ほとんどしない」と答えた生徒の割合は、県全体が21.0%、本校生徒が12.7%である。しかし休日や長期休業中の学習時間について「ほとんどしない」生徒の割合は県全体が10.2%、本校生徒が12.7%と上回っている。

3年生

学力・学習状況調査から「高校卒業後の進路として、現時点で希望しているものは」という質問では、昨年度からの変化が「国公立大学」では1.6%→11.7%、「専修学校・各種学校」では37.7%→45.0%、「未定」21.3%→8.3%となっており、進学希望者の方向性が定まってきている

ことがうかがえる。一方で「学校の授業内容をどの程度理解しているか」という質問では、「理解できると理解できないが半々」53.3%、「理解できないが多い」11.7%、「ほとんど理解できない」3.3%であり、県全体の値よりも上回っている。これは前年度と比べても増えている。

数学の学力調査結果では、設問別正答率から「論理的に考える力や数学的な考え方を身近な事象に活用する力」が不足していることが分かった。これは県全体の傾向と一致している。また教科別の各種度数分布表からは、国語や英語に比べて習熟度の二極化が顕著であることが分かった。

【事前レポート：課題別テーマ「生徒の思考を深める授業展開についての工夫と実践上の課題」】

生徒の思考を深める授業展開についての工夫については、以下の3つについて取り組んだ。

○昨年度2年生の数学Ⅰと数学Ⅱの授業ではプロジェクターとプリントを活用して板書量を減らし、演習と解説の時間を多くした。解説ではできるだけ問題毎に担当する生徒を決めて生徒自身に解説させ、私自身は質疑応答で思考が深まるようサポートした。

○プリントには余裕のある生徒用に、授業では扱わないが応用問題も載せるようにした。

○基本的な計算が苦手な生徒のために各単元の初めに学び直しの時間を設けている。

続いて、以下の3つが実践上の課題と感じられた。

課題①：1つの授業内での問題演習量や生徒の理解度については向上したが、進度を落としていないため、数学を苦手とする生徒にとっては1時間内に理解した学習内容を定着させた状態で、次時の授業を受けるのは困難である。

課題②：日々の家庭学習の習慣が身についていない生徒が多く、分かる授業を実施しようとした際に既習事項の復習に割く時間が大きくなってしまい、質疑応答に十分な時間を割くことが困難である。

課題③：高校入学後間もなく実施している課題テストにより、学び直しの必要な内容などの実態把握はできているが、1年間学び直しを実施した後でどのような変容が見られたのかという成果の分析が不十分である。

【Ⅱ期内容】9月17日（火）	○教師が使えるカウンセリングの技法（講義・演習）
	○生徒の実態を踏まえた授業改善②（講義・協議・演習）

【事前レポート：Ⅰ期の内容を踏まえての授業改善】

上記の課題①～③について、次のような取り組みを実施した。

課題①

1年生の授業では、次回の定期考査までに課される週末課題とその提出日を全て予め明示し、生徒が家庭学習を進めやすいように配慮した。私自身のパソコンの故障により、ノートパソコンを授業に持参してのプリントとプロジェクターを用いた授業展開が困難になり、授業進度は自然に遅くなってしまっ

た。学習内容の定着度は良いものの、進度に余裕のある生徒が目立つようになった。

2年生の授業では、ほとんど1年生と同様の振り返り内容である。大きな違いとしては、毎時間その単元の応用問題を余裕のある生徒用に提示しているが、積極的に取り組む生徒が増えてきた。(その要因は不明)

3年生の授業では、I期でアドバイスを貰ったとおりに乱数アプリの活用を考えたが、パソコン故障により、代替案として出席番号の書かれたカードを用意して日直や前の問題が当たった生徒に引いてもらって指名するようにしてみた。授業の問題演習に真剣に取り組む生徒が増えるとともに、進路決定の時期でもあり、予習する生徒が大幅に増えた。

課題②

1年生の授業では、中学校までの基本的な計算ができない生徒が多いことと、数学に苦手意識を持った生徒が多いこともあり、生徒同士に質疑応答や議論する場を設けても思考の深まりは大して得られないと考えた。丁寧な解説を徹底し、教員側からの小さな発問を散りばめて生徒とのやりとりを軸にして解説を作っていく授業形態を実施してみた。夏休み明けからのまだ短期間ではあるが、授業中、寝てしまう生徒が減ったように感じている。(因果関係は不明。検証が必要か。)

2年生の授業では、1年生と同様の取り組みを進めている。生徒の活動する時間はほとんど無くなったものの、以前よりも集中して授業に臨む生徒が増えたように感じている。

3年生の授業については、2年生と同様である。

課題③

1年生は2クラスで、それぞれを2グループに解体して授業を行っている。グループごとに学び直しとして扱う内容に差が生まれないように、共通のプリント(テキスト)を用意して授業を行った。

例えば、「2次関数を扱う前に、1次関数を復習しておこうかな…。進度に余裕があるから1時間丸々使っても大丈夫そうだな…。」というように、担当者が漠然と学び直しを単元の初めに行うのではなく、テキストを用意し、時間も複数時間割くことで授業中での説明や生徒観察も丁寧に行うことができ、中学校段階で理解できていない点の把握がより正確にできたと感じている。今後は「基礎力診断テスト」(仮称)を作成し、年度始めと年度末に実施し、学び直しの成果をしっかりと計りテキストの内容改良に活かしたい。また、何年間か継続して実施することで過年度比較できるようにし、各学年の生徒の特性や傾向を把握できればと考えている。

高等学校新任生徒指導主事研修講座

教 諭 渡 邊 一 郎

【日時】Ⅰ期 令和元年5月13日(月)

Ⅱ期 令和元年9月19日(木)

【会場】秋田県総合教育センター

【研修の目標】

生徒指導主事として必要な基本的事項と、各学校の生徒指導の状態に応じた具体的な対応の在り方について理解を深める。

【研修内容】Ⅰ期目

10:00～ 開講挨拶

主 幹 赤坂 亨

10:15～ <講義>生徒指導主事の役割

指導主事 高橋 華子

13:00～ <講義>特別支援教育における

支援チーム作りのために

主任指導主事 村松 勝信

14:40～ <講義・演習>合意形成に向けた

校内研修の手法と実際

【研修内容】Ⅱ期目

10:00～ <講義・演習>いじめなど問題行動の理解と

校内研修の進め方

指導主事 高橋 華子

13:00～ <講義>災害や事件・事故発生時

における心のケア

みやぎ心のケアセンター

副センター長 福地 成

【受講内容】

新任者の研修ということで年2回に分けて研修講座を実施して頂いた。1回目の講座では、生徒指導の意義として、「生徒の個性の伸長を図りながら、社会的資質や能力の育成を主眼に社会的自己実現が出来る資質を形成する指導援助であり、個々の自己指導能力を育成する。」ことが大きな目的の柱である。その為には、①自己存在感を与えること、②共感的な人間関係の育成、③自己決定の場を与え可能性の開発を援助する、この3点に留意した活動が必要である。その中における生徒指導主事の役割として最も大きな位置を占めるのは、「連絡調整や指導助言」の部分のようである。学校現場における生徒指導では、あらゆる場面において生徒育成の機会があり、決して限られた人たちだけの領域ではなく、生徒に関わる全ての人達にその役割が課せられている。授業や学級活動、学年部や委員会、部活動などの場面である。それぞれの立場において生徒指導の実践が成されていると思うが、指導をめぐる現状は複雑で負担や問題の抱え込みがあることで問題の解決が遅れてしまう。このような状況を防ぐ意味においても学校全体として進めて行く必要性が大切である。そのための連絡・調整役として主事が果たすべき役割がある。

実際の生徒指導上において、①実態把握の重要性。指導主事としては、指導の重点事項を明確化し、共通理解を図りながら適切な情報収集と課題を明確化し、教職員との連携を図ること。②現状を踏まえた取り組み課題について校長先生を中心として具体的な計画の策定が必要になる。③教職員全員での共通理解と取り組みが必要である。そのためには周知の徹底が出来ている事や指導のぶれにつながらないために、全員で取り組む意識と役割分担を持つ事が大切になる。

本校も含め秋田県の現状や課題としては、授業を軸とした生徒一人一人の活躍が認められる場の設定であったり、不登校児童が増加しない為の即時対応の取り組みが求められている。これらを実践していくための生徒指導としては、関係者全員で取り組むという意識と組織的な対応(関係機関などとの連携も含む)をもって臨む姿勢を持つ事が重要である。信頼される学校作りの上で欠かせない生徒に対する指導には、何を指導したかではなく、指導した事が生徒にどのように届いたのかが重要で、最終的に生徒との信頼関係が保護者や地域との関係につながっていくことになる。

2回目の講座では、実際に現場で起こりうる状況を想定しながらの実践的講座(演習)となった。

午前中は、「いじめなどの問題行動の理解と校内研修の進め方」で初めに危機管理のさ・し・す・せ・そについての復習として覚えているかの確認をしながら学校を取り巻く状況の変化について再確認した。

次に「いじめ」について正確な認知の推進、いじめの4要素、いじめに係わる情報の報告、いじめの重大事態、いじめの解消の順に内容の確認をしていく。

校内研修を進めるためには、いじめ対策組織の役割や対応の手順、留意点について演習(事例)をとおして再確認した。保護者への対応についての4つのステップについて、学校として必要な事は何かなどについても再確認し、最後にはあるケースのシナリオについて配役を決め、実際の状況を想定しながら演じてみる事で、受け取る印象などについて体感しながらグループでの協議へと進めて行った。

午後からは、「災害や事件・事故発生時における心のケア」ということで、みやぎ心のケアセンター副センター長の福地成先生の講義(演習が中心)が行われた。先生は海外などでも活躍されているなど経験が豊富で、その中で極限状態に置かれた弱者の心理や行動について多くの症例を持っておりとても参考になる講義(演習)となった。演習(シミュレーション)の中では災害時を想定した避難所での状況設定という事でどのような状況が想定できるか、この反応としてどんな事が起こっているのかなどを多角的に想像しながら対処行動について学んでいく方法だった。年齢別での心意的行動の違いや全体に共通して起こりうる現象などについての内容だったが、一つのキーワードとして、**Psychological First Aid**の原則から「見る・聞く・つなぐ」があげられていた。周りをよく観察し、声を掛け、相手の話をうまく聞き出し、必要なところへとつないでいくという支援行動についてであった。実際演習の中では自分が思っているようには出来ず、その現場に遭遇したときのことを想像すると、本当に正しい行動がとれるのか不安になる場面もあった。最終的には、全ての支援的行動においては、個の対応ではなく組織的な対応を心がける意味においても、一人で抱え過ぎず周りとの協働を常に意識した支援活動でありたい、とのことだった。

【感想・その他】

この2日間の研修を終えて、生徒指導主事の役割は決断を下すことではなく、むしろ縁の下で力持ちのように情報を収集したり、提供したり、助言するなどのつなぐ役割を担うことで、全ては組織的に問題を解決するための一役を担う存在であることを考え学ぶ事が出来た研修であった。

日々の生活の中では小さな事から大きな事まで刻々と変化する状況への観察力や事故予防のための声かけ、気になる事への情報共有など多くの事から必要な事を敏感に感じる感覚を身に付けていくことと、チームとしての組織やメンバーの在り方、役割についてを考えながら事故のない学校生活を生徒達自身がおくれる環境作りのための行動をしていかななくてはならないと強く感じる研修となった。

日々時間を重ねていく中で、これらの事を常に意識しながら自己の役割が果たせるよう取り組んでいきたいと感じた。

養護教諭（臨時）研修講座A

臨時養護教諭 塚本 琴美

【研修の目標】

養護教諭としての心構えを身につけ、県内の公立学校に勤務する講師として必要な資質能力の向上を図る。

【期 日】平成31年4月22日（月）

【会 場】秋田県総合教育センター

【日 程】10:00～秋田県の教員として（挨拶）

10:35～教育公務員の服務（講義）

13:00～学校組織の一員として－組織人の基本－（講義・演習）

14:00～学校保健活動について（講義・演習）

【受講内容】

午前は 10:35 から、教育公務員の服務について、秋田県教育庁高校教育課管理主事の牛丸靖浩先生より講義をしていただいた。教員として勤務するにあたり重要なことであり、これからの教員生活に自覚と責任を持つ上で大いに役立つものであった。特に、教育公務員の服務についての講義では、不祥事についてグループで検討したことで、不祥事防止に努める必要性を改めて確認することができた。

午後は、13:00 から、学校組織の一員としての基本について、秋田県教育センター指導主事森川剛先生より講義をしていただいた。仕事をするにあたり、報告・連絡・相談を基本のコミュニケーションとして、組織で目標や情報を共有し、組織の一員として自覚することが大切であると実感した。また、14:00からは学校保健活動について教育庁保健体育課指導主事の熊谷有紀子先生より講義をしていただいた。学校保健の領域と構造、学校教育における位置づけや、養護教諭の役割について再確認する機会となり、これから養護教諭の職務に大いに役立つものとなった。特に、実際に生徒が熱中症になり倒れた時の対応を検討した時に、多数の先生方の考えを聞くことができ、新たな発見もあり、大変参考になった。組織の一員として、養護教諭の専門性を生かし、児童生徒のよりよい学校生活のために工夫していきたいと思う。

【まとめ】

養護教諭（臨時）として勤務するにあたり、教員としての基本を身につけることができ、良い機会であった。学校が求める養護教諭を知ることで、現在の自分自身の課題を見つけることができた。子どもたちと向き合い、心を育む教員を目指し、日々学びながら精進したい。

最後になりますが、御指導いただきました先生方にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

各教科等の指導における言語活動の充実

教 諭 佐藤 裕也

【研修の目標】

「言語活動の充実」についての基本的な考え方、各教科等における指導と評価のポイントを確認し、思考力・判断力・表現力等を育む指導力の向上を図る。

【会場】秋田県総合教育センター

【日時】令和元年5月24日（金）

【日程】「言語活動を位置づけた指導の実際」（講義・協議・演習）

「各教科等の資質・能力を育成する『言語活動の充実』のポイント」（公開講演）

【受講内容】

「言語活動を位置づけた指導の実際」では、言語活動の充実が求められる背景や、学習指導要領における位置づけなどを丁寧に教えていただいた。忘れてはならないのが、言語活動はあくまで「手段・手だて」であって、「目的」ではないということである。所謂「活動あって学びなし」という最悪の授業に陥らないためにも、各単元でつきたい力を明確に設定し、それを実現するために最も有効な言語活動を考えて授業を創っていかねばならない。

また、グループ協議ではこれまでの授業実践例や経験をもとに、言語活動の在り方、課題などを討論した。協議を重ねていくうちに、発問を工夫することが肝要であるという点に帰着した。良質な発問は生徒の知的好奇心を刺激し、深い学びへと誘うからである。逆に言えば、質の悪い発問では学びは深まらないということだ。

「各教科等の資質・能力を育成する『言語活動の充実』のポイント」では、横浜国立大学名誉教授の高木展郎先生から講演をいただいた。新学習指導要領の文言やカリキュラム・マネジメントの意味を繙き、学校のグランドデザインを創ることの重要性を教えていただいた。とりわけ印象に残っているのは、「深い学び」の実現のために鍵となるのが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である、という点だ。国語の新学習指導要領の教科目標には「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とある。言葉に着目したり、言葉を使って考えたりすることが求められている。アクティブラーニングの視点から授業の充実を図り、言語能力を向上させるための言語活動を模索していかなければならない。

【まとめ】

2006年のPISA調査の結果を受け、言語活動の充実が本格的に打ち出された。その後何度か学習指導要領は改訂されているものの、言語活動の充実を図ることは明記され続けている。

人間は言語を駆使して生きていく生き物である。そのため、語彙を充実させることや、言葉を使って表現したり考えたりする力を養うことは、すなわち生活を豊かにすることであると考えられる。ゆえに、言語活動の充実を図ることの意義は大きい。言語活動の充実を図るとなると、どうしても教科の中で完結してしまいがちではあるが、そうではなくて、教育活動全体を通して育成すべき能力であると実感した。

高等学校保健体育科授業の充実

教 諭 石 井 智 子

【日 時】 7月11日(木)～12日(金)

【場 所】 秋田県総合教育センター

【研修の目標】

学習指導要領の保健体育科の目標及び内容を具現化した授業づくりのための実践力を養う。

【日程と内容】

11日(木)：これからの保健体育科の授業づくり① (講義・協議・演習)

12日(金)：これからの保健体育科の授業づくり② (体育館での実習)

【実施内容】

<1日目>

今後の学習指導要領改訂に関するスケジュールをもとに、改訂されたポイントの確認や見直しから始まった。ポイントは、育成を目指す資質・能力の見直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、科目「保健」の内容構成の見直しだった。改訂されたポイントごとに具体的な行動を取り上げ、どのような観点で評価していくのかを話し合った。次に、単元の指導と評価の計画の作成に向けて、手順等の確認を行った後に班に分かれて作成した。私の班は「ダンス」の計画を担当した。私は学習内容の学びに向かう力、人間性の内容を担当し、学習の流れに合わせながら作成した。中間発表を1つの目標に、一人一人の違いに応じた表現や発表の仕方の工夫、仲間に課題を伝え合ったり教え合おうとする姿の提案をした。各担当の提案をまとめ、発表した。各班の発表後、萩原指導主事から、「学習の流れ」は作り込みすぎないこと、「学習内容」は一度付箋に書いてまとめること、「評価規準」は「学習内容」との整合性を持たせることの確認があり初日は終了した。今回の計画表を参考に本校の計画表も作成に入りたいと思う。

<2日目> 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められているが、ただ単に「よく理解できた」ということではなく、知識と知識をつなぎ合わせることで、課題を解決したり、新しいことに気が付いたりすることができる力を身に付けることも求められている。その持っている知識をつなぎ合わせて、学習課題を解決する模擬授業を行った。まとめでは、ねらいを達成した生徒の姿も盛り込むよう指示があった。私はバドミントンの模擬授業を考えた。空いたスペースを狙って打つことを目標に、コートの大さを制限し、得点させる内容にした。簡易ゲームを行う際にコートの大さを半分にしたり、1/4 にしてどのような打ち方をしたら得点できるかを考えさせる内容にしたりした。最後にオールコートになった時に前に得ていた知識をつなぎ合わせて、空いたスペースを狙った幅広い攻撃ができるようになった生徒の姿をまとめとした。他の種目でも、助け鬼をすることでバスケットボールのディフェンスにつなげた授業を受け参考になった。主体的・対話的で深い学びに向かうために教員の役割も大きく変わろうとしていて、ただ知識を伝達するだけでなく、生徒が自分で課題を発見し、人と協働して問題を解決していく力を引き出し、彼らの創造性を抑えるのではなく、より解き放つ役割を引き受けられる教員が求められているとまとめ、閉会した。

ねらいは、生徒がどの段階でどのような姿になればよいのかを記す、学習の流れは、段階を踏んで、ねらいを達成するためにどのような学習をするのかを示す、評価規準は、学習内容、学習活動、生徒の実態を踏まえた観点ごとの評価の基準を、評価機会は、評価規準の番号を転記しながら評価の期間を記すことを確認し合い、各班に分かれ、計画の作成を行った。

子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である。

高等学校家庭科授業の充実

教 諭 今川 浩子

【日時】令和元年9月26日（木）

【会場】秋田県総合教育センター

【研修の目標】

学習指導要領の要点を押さえ、目標及び内容を具現化した授業づくりのための実践力を養う。

【日程】

10:00～ あいさつ

主 幹 森山 直人

10:10～ これからの家庭科の授業づくり

指導主事 部谷 靖子

13:00～ 講義・演習 学習指導の実際

16:00～ 研修の振り返り

【受講内容】

新学習指導要領改訂の背景に、子どもたちの現状と課題として、学力調査の結果より次のことが分かった。

- ①判断の根拠や理由を明確に示しながら、自分の考えを述べるのが苦手である。
- ②学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しにくく、社会生活に生かせない。
- ③情報化の進展で、視覚的な情報と言語との結びつきが希薄で、読解力に問題がみられる。

また、次のような課題もある。

- ①命や自然の大切さへの理解、文化芸術の感性を深める機会が限られている。
- ②多様な人々と協働する中での規範意識や、よりよい生き方を模索する機会などといった道徳教育が不足している

この改善の方向性として「主体的・対話的で深い学び」の実現（アクティブ・ラーニングの視点）が重要になる。ここで「深い学び」の視点として、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら・・・とあるが、家庭科における「見方・考え方」とはどんなことなのかについてグループワークをした。解説を参照すると家庭や家族、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働・健康・快適・安全・生活文化の伝承・創造・持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫することとあるので、授業をする際にはこの見方・考え方を働かせて資質・能力を育む指導を心がけてほしいとのことであった。

次に学習評価の改善の基本的な方向性は

- ①児童生徒の学習改善につながるものにする。
- ②教師の指導改善につながるものにする。
- ③これまで慣行として行われてきたことでも必要性・妥当性が認められないものは見直す。

評価の基本構造として評定（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）と個人内評価（観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒一人一人の良い点や可能性、進歩の状況）がある。

今回改めて、新学習指導要領をふまえた家庭科の授業づくりについて研修した。この講義は今後も継続していただきたい。現在取り組んでいる他校の実践例を聴く機会、協議の場も積極的に取り入れると同時に家庭科教員としては、ものづくりの実習も適宜あると良いと感じた。

この研修をふまえての実践として、2年生の授業において、男女の違いと社会的な問題をあげ、本当の意味での「男女平等について考える」をテーマに2時間授業をおこなった。資料として男女共同参画副読本「みんなイキイキ」も活用し、グループ活動、ジグソー学習形式で授業を展開した。題材はやや難しいが、自分の日常と照らし合わせながら話し合いが行われ、生徒の発表や振り返りシートから男女の平等についてよく考える授業になったと感じている。今後も「見方・考え方」を働かせる授業形態を検討し、実践していきたい。

【研修の目標】

英語によるディスカッション等の体験を通して、英語科の授業を担当する教員自身の英語運用能力の向上を図る。

【会場】 秋田県総合教育センター

【日時】 令和元年7月4日（木）

【受講内容】

- 1 スキルトレーニング
- 2 コミュニケーションプラクティス

【概 要】

- 1 スキルトレーニング

すごろくで自己紹介をする活動、「ミッケ!」という絵本と同じ要領で絵の中から指定された人物や物を見つける活動、ALTの自己紹介を使って異文化理解を深める活動、そして学校に対する要望を英語で書く活動を体験した。

- 2 コミュニケーションプラクティス

カードを使ってお互いに質問しあう活動、あるカテゴリーに関する単語をできるだけ多く書く活動、ビンゴ、背中に貼られた事物について英語で説明し正解させる活動、絵についての説明や物語を書く活動、与えられた絵について説明しパートナーに絵を描かせる活動、最後に間違い探しを行った。

【感 想】

カードを使ってお互いに質問しあう活動と、さまざまな名称はあると思うが「Who Am I」ゲームのような活動は、実際に授業で行ってみたところ、生徒たちが楽しそうに参加し、積極的に英語を使用していた。加えてこれらの活動は、活動時間も調整でき、教科書のどのような内容においても使用することができる、など応用性が高い。私自身も楽しく研修に参加することができた。

【研修の目的】：

児童生徒の特性に応じた指導・支援に生かすことができるように、ふだんの授業や日常の観察から、より専門的なWISC-IV知能検査の結果を分析するまでのアセスメントの方法や解釈の理解を深める。

【会場】 秋田県総合教育センター

【日時】 令和元年6月26日（水）

【受講内容】

- 1 アセスメントの方法とその進め方
- 2 WISC-IV知能検査結果の分析と活用

日本臨床発達心理士会茨木支部 支部長 大穴 一志 氏

【概 要】

- 1 アセスメントの方法とその進め方

能力や特性のような生徒の個人因子と、過去や現在の環境のような環境因子を評価・査定（アセスメント）するため、教員に必要な基本的な姿勢と視点を踏まえた上で、行動観察と情報収集について具体的な方法と進め方について講義が行われた。

- 2 WISC-IV知能検査結果の分析と活用

WISC-IVを「子どものつまずき（＝問題、主訴）の能力的な原因と対策を知るために実施する」という大前提の基、WISC-IVにおける数値の読み方とそこから読み取れる児童・生徒の思考や行動の傾向、そして想定できる支援の方法について、学習障害疑似体験を交えながら大穴一志氏より詳細に講授された。

【感 想】

生徒との信頼関係を構築する、行動観察や情報収集は複数の教員でする、といった基本の重要性を再確認できた。WISC-IVについても、数値について大変詳しく説明していただき、勉強になった。

なお、2014年にアメリカでWISC-Vが出版され、現在日本版出版のための準備が進められている。

地理歴史科学学習指導案（地理A）

日 時：令和元年11月28日(木) 5校時
対 象 生 徒：普通科総合コース情報系 3年C組(17名)
授 業 者：教諭 柴田 果 織
場 所：視聴覚室

- 1 単元名 1部 世界の諸地域の姿と地球的課題
3章 世界の諸地域の生活文化 4節 南アジアの生活・文化
(使用教科書：『高等学校 新地理A』〔帝国書院〕)

2 単元の見聞

- (1)南アジアの自然環境や歴史、文化、産業などの地域的特色を理解させる。
(2)南アジアの人々の生活や産業の発展について、地域性や歴史的背景をふまえて考察させる。

3 単元と生徒

(1)教材観

仏教や七福神、ダルマなど、日本に根づいている文化の中には、南アジア由来のものがある。また近年は、日本で暮らす南アジアの人々が年々増加しており、日本企業も南アジアに進出するなど、経済面でもつながりを強めている。今後、日本と南アジアの交流は益々さかんになるだろう。そのためにも、南アジアについて理解を深めることが必要だと考える。

(2)生徒観

男子8名、女子9名、計17名のクラスで、全体的に真面目に授業に取り組んでいる。ただし、発問に対して積極的に答える生徒は固定化されている。また、資料を読み取ることができても、自分の言葉でまとめることを苦手としている生徒が多い。

(3)指導観

南アジアの自然環境や歴史、文化、産業などの地域的特色を理解させるとともに、それらの知識と資料をもとに南アジア社会について考察し、自分の言葉でまとめて他者に説明できるように指導したい。

4 単元の計画

- | | |
|------------------|----------------|
| 1 南アジアの自然環境 | … 1時間 |
| 2 南アジアの歩みとヒンドゥー教 | … 1時間 |
| 3 南アジアの産業の発展 | … 1時間 |
| 4 インドのICT産業 | … 2時間（本時は2時間目） |

5 単元の評価規準

関心・意欲・態度	南アジアに対する関心と課題意識を高め、それを意欲的に追究し、とらえようとしている。
思考・判断・表現	南アジアについての課題を見出し、地域性や歴史的背景をふまえて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。
資料活用の技能	南アジアとその周辺に関する資料から、有用な情報を適切に選択して読み取ったり、まとめたりすることができる。
知識・理解	南アジアの地域的特色について、基本的な事柄や追究の方法を理解し、その知識を身につけている。

6 本時の計画

- (1) 本時の目標 前時に資料から読み取ったことと他者の説明をもとに、学習課題に対する考えを深め、表現することができる。(思考・判断・表現)

(2) 展開

《前時の授業（エキスパート活動）》

エキスパート班に分かれ、3つの異なる資料について話し合いながら読み取る。

資料A：インドとアメリカの位置関係から考える

→アメリカが夜の間、インドは昼なので、アメリカから仕事を依頼されやすい環境にあることを読み取る。

資料B：外国企業との関係から考える

→(1)イギリスの植民地であったことや英語教育により英語が堪能な人が多く、外国企業と仕事をする上で役立つことを読み取る。

(2)インドの賃金がアジア諸国のなかで安く、また、人口がこれからも増え続けることから、外国企業が安価で豊富な労働力が確保できることを読み取る。

資料C：インドの社会構造から考える

→ICT産業はカースト制にない職業であり、親の仕事に関係なく就くことができることと、努力次第では、海外の企業で働き、多くの収入を得られるため、インドでICT産業の人気の高いことを読み取る。

過程	学 習 内 容	指導上の留意点	評価の観点
導入 (5分)	○エキスパート活動の確認 前時に話し合ったことをもう一度エキスパート班で確認し、ジグソー班に分かれた時に説明できるよう、準備する。 ○学習課題の提示		
学習課題：「なぜ、インドでICT産業が発展したのか？」			
展開 (35分)	○ジグソー活動（20分） ジグソー班に分かれ、それぞれの資料をもとに説明する（説明を聞く）。その後、学習課題に対する結論を出すためにグループで話し合う。 ○クロストーク活動（15分） 3つの説明をもとに、学習課題について各グループで話し合ったことをまとめ、報告する。 聞き手は、他のグループの報告をしっかり聞き、自分たちの考えとの共通点や違いを考える。	一人ひとりが資料のエキスパートとして、説明ができるか、確認する。 箇条書きにせずに文章にまとめるように注意を促す。	話し合いに積極的に参加しているか。 (関心・意欲・態度) 他者の説明を聞き、自分の考えを深め、表現することができるか。 (思考・判断・表現)
まとめ (10分)	○授業の振り返り	資料から読み取れない他の原因もあることを紹介する。 課題もあることを付け加える。	

____年____組____番 氏名_____

【問2】ジグソー活動を通して、他の人の話を聞いて、「なぜ、インドでICT産業が発展したのか」をグループでまとめよう。

Aの資料によると、

Bの資料によると、

Cの資料によると、



() 班の結論

以上の理由から、インドでICT産業が発展したと考える。

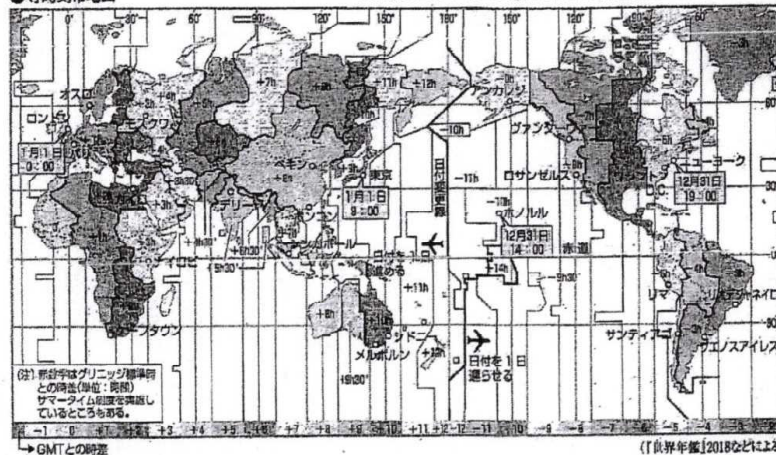
資料A インドとアメリカの位置関係から考える

学習課題：なぜ、インドでICT産業が発展したのか？

《資料1》

●等時刻帯地図

※図はロンドンと世界各地の時差を示したものである



《資料2》

ICT 大国として真っ先に思い浮かぶのは、何と言ってもアメリカである。なかでもサンフランシスコのシリコンバレーからは、Google、Facebook、Yahoo、アップルなど、ソフトウェアやインターネット関連企業が多数生まれ、ICT 企業の一大拠点となっている。一方、インドのバンガロールは、ICT 企業が集申し、「インドのシリコンバレー」と呼ばれている。

今はグローバルな世の中なので、アメリカから他国へ仕事を依頼することは珍しくない。インドの ICT 産業は、アメリカ企業からソフトウェア開発などの仕事を依頼されることで、急成長している。



【課題1】《資料1》を参考に、インドとアメリカ合衆国の2都市の時差を求めよう。

インド と ロサンゼルス ……

時間

インド と ニューヨーク ……

時間

【課題2】《資料1》と《資料2》を参考に、インドとアメリカ合衆国の時差が、仕事を依頼するアメリカ企業にとって都合が良い点についてまとめよう。

資料B 外国企業との関係から考える

学習課題：なぜ、インドでICT産業が発展したのか？

《資料1》

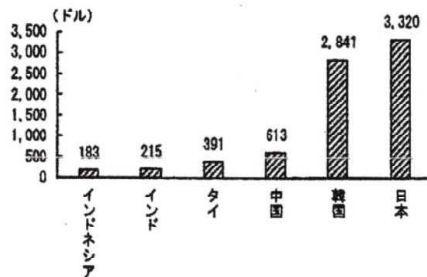
インドには多様な言語が存在している。公用語として定められているのはヒンディー語であるが、他にも21の指定言語が憲法で定められている。加えて、インド全域では約2,000もの方言があると言われている。そのため、公用語であるヒンディー語が話せたとしても、インド全域でスムーズな言語コミュニケーションがとれるとは限らない。特に南部においては、ヒンディー語を全く理解しない人が少なくない。

インドでは英語も第2母国語と言えるほどに広く用いられている。かつてインドがイギリスの植民地だったころ、政策によって英語は急速に普及した。そして現在、インドでは6歳から英語教育を始めており、大学の授業で使用されるテキストはほぼ英語である。このような理由から、インドでは、ビジネスシーンはもちろん、日常会話に英語を使用する人も増えている。

【資料2】英語人口トップ10

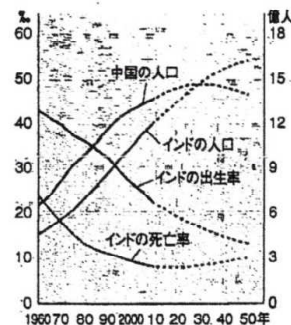
1	アメリカ合衆国	251,388,301
	95.91% of Population	
2	インド	125,226,449
	11.38% of Population	
3	フィリピン	89,800,000
	92.58% of Population	
4	ナイジェリア	79,000,000
	53.34% of Population	
5	イギリス	59,600,000
	97.74% of Population	
6	ドイツ	45,272,000
	56% of Population	
7	カナダ	25,246,220
	85.18% of Population	
8	フランス	23,000,000
	36% of Population	
9	オーストラリア	17,357,800
	97.03% of Population	
10	イタリア	17,000,000
	29% of Population	

《資料3》インドの賃金



(備考) 1. ILOより作成。
2. 2013年の月平均賃金。インドのみ2011/7～2012/6。

《資料4》インドの人口の推移と将来の予測



【課題1】《資料1》と《資料2》を参考にして、インドの言語事情が、外国のICT企業との関係にどのような影響を及ぼしているかをまとめよう。

【課題2】《資料3》と《資料4》を参考にして、インドの賃金や人口が、外国のICT企業との関係にどのような影響を及ぼしているかをまとめよう。

資料C インドの社会構造から考える

学習課題：なぜ、インドでICT産業が発展したのか？

《資料1》

ヒンドゥー教はインド人の生活に深く根付いている。その一つが、カースト制度とよばれる身分制度である。差別は憲法によって禁止されているが、カースト制度は今でも社会に大きな影響を与えている。

職業についても未だにカースト制度の影響が残っている。もともとシュードラだった人は、今もほとんど肉体労働の仕事しか選択肢がない。肉体労働をしている人は、月に6,000～16,000円程の給料で家族を養わなければならないためとても貧しく、子どもたちは教育を受けられない人が多い。そのため彼らの子どもたちもまた、肉体労働の職業しか選べない状況になる。

しかし、カースト制度が廃止されたあとにできた職業については、カースト制度の影響をあまり受けない。その代表例がICT産業である。ICT産業の出現により、少しの運と才能、そしてたゆまぬ努力によって、低いカーストの人にも貧困から抜け出せるチャンスが訪れた。こうしてインドでは、「貧困からの脱却」を胸に誓い、ICT技術を身につけるために上位大学への入学を希望する若者が増えた。



《資料2》都市部で働くインド人の平均的な月収 (2011-2012)

業種	給与
農業	約 11,000 ルピー (約 17,000 円)
鉱業	約 24,000 ルピー (約 38,000 円)
重工業	約 12,000 ルピー (約 19,000 円)
建築	約 10,000 ルピー (約 16,000 円)
商業	約 6,600 ルピー (約 10,000 円)
サービス業	約 16,000 ルピー (約 25,000 円)

《資料3》

インド工科大学 (IIT) とは、インドに 16 ある国立大学の総称である。2012 年のデータによると、定員 9590 人に対して、受験者数は約 50 万 6000 人。実に約 53 倍の倍率で、98% の受験生が涙をのむ入学試験である。

この大学を卒業したインド人の多くが、破格の給料を提示され、海外の ICT 企業で働いている。アメリカ合衆国の Google では 1400 万円もの年収を用意するという。インド国内の ICT 技術者の平均年収が 100 万円程度であることを考えれば、破格の額である。

【課題1】《資料1》を参考に、低いカーストの人々にとって、ICT産業にはどのような魅力があるかをまとめよう。

【課題2】《資料2》と《資料3》を参考に、賃金（収入）という観点からICT産業の特徴をまとめよう。

公開授業研究会の研究協議 I

<授業者から>

○地理は専門ではなく、十和田高校に来て初めて地理の授業を持った。どのような研究授業を行えばよいか分からない状況であったが、八柳先生が来校したとき、ジグソー法の授業をしているのを見て興味を持ったこともあり、今回はジグソー法を使った授業を行った。
生徒達は、事前に3時間程度インドについての授業を行い、そして前の授業で資料の読み取りを行い、この授業がそのまとめとなる授業であった。

○今回は「学びあいを意識した言語活動」がテーマであるが、生徒達は仲の良い生徒同士では話ができるが、普段はなかなか話し合えないこともあり心配した。研究授業ということもあり、よく話し合いを行っていたと思う。生徒達は頑張っていた。このような活動は今後も行っていきたい。

○自分自身、ICTを用いた授業はほとんど行わない。しかし、ICTを使った授業に生徒はよく慣れていると感じる。今後は取り入れていく必要があると思う。今回の研究授業を行うにあたり、色々な先生方から教えていただきながら、ICTの活用方法について学ぶことができたのが、一番大きな収穫であったと考える。

<授業を参観しての感想>

(岩澤) ICTを用いた授業は、具体的にどこが良かったか。

(柴田) 生徒の結論をまとめた文章をみんなに見せたいと思っていた。それらを黒板に書くと時間がかかる。そこで、今回はスマホで写真をとってスライドに写すことにした。音だけでは入っていないものも、映像にすることで伝わりやすいと考えた。

(櫻庭) 生徒たちは最初のグループで考えたことを伝える活動はできていたと感じた。その伝え方については、聞く人のことを考えながら気をつけて話をしていた生徒もいれば、そうでない生徒もいた。その点に関する指示があってもよかったと思う。最初に紙を見せずに伝えるように強調していたこともあり、頑張って話をしていたと思う。

一方で、結論をまとめる作業をしている際、生徒達はどこまで議論をしたか疑問に思う様子があった。持って行き方として、グループで共有するためにどのような話し合いをさせればよいか課題と感じた。

また、指導案の指導上の留意点で「資料のエキスパートとして説明できるか、確認する」とあるが、何を確認するのか、授業を見ていて分からなかったので教えて欲しい。

(柴田) このことについては、きちんと説明させるという表現が適切だったと思う。

(神居) 導入でグーグルのCEOやマイクロソフトのCEOの話など、新しい学習課題に対して、馴染みのないことでもあり、身近な話題を用いたことが課題に入りやすくなり、よかった。

今回はジグソー活動、クロストーク活動であったが、1つの資料の理解を踏まえた上で、新しい視点の話を聞くことは、新しい発見や視野を広げることができるので、自分自身も今後の参考にしたいと考えた。

質問が1つ。他の資料を確認する時間は設定しているか。

(柴田) A, B, Cの資料は全員に渡して見て見ることができる状態にある。授業では担当する資料のみを扱っている。他の班の話を聞きながら資料をみてほしかったが、時間的な余裕もなく出来なかった。後で読むと理解が深まると思う。

- (木村) 生徒達が難しい資料をよく読みこんでいると感じた。そのための指導も良かったのだと思う。全部の資料について考えると5時間では収まらないと思うので、この方法で行うことの良さを感じた。プロジェクトがあるので、グーグルとアマゾンなどのロゴがでてくると、なお良かったと思う。
- 振り返りの仕方として、英語の場合は、授業の最後10分は生徒に返すことになる。こちらが話すのではなく生徒が話したり書いたりしてまとめるのだが、社会は授業の振り返りはこのような終わり方かと感じ、教科の違いを感じた。
- (加賀) 教科書は使わずとも、焦点化して資料を準備して授業を行うことは大事だと感じた。また、最後のまとめがきちんと準備されていて良かった。
- (工藤) 表現は別にして、内容を読み取ってまとめの文章が書けていた。話し合いとしてまとめることはまだまだであると感じ、今後の訓練が必要だと思った。最後のまとめで、インドの課題は何かについて生徒が認識出来ればなお良いと思う。
- (佐藤) ジグソー活動は扱ったことがないものであった。1人1人が責任を持って取り組み、新しい情報を選択したり、吟味したりと汎用的な思考力が養われると感じた。国語でも活用できそうだったし、ジグソー活動の意義があってよかった。
- 質問として、クロストーク活動において生徒達の違いや共通点は、どのように想定していたか、違いがあるとさらに考えも深まると思ったが。
- (柴田) 違いは出なかった。A～Cの資料を読み取らせた際、読み取れなかったこともあり、アドバイスをしながら行ってしまう、そのため他と違った答えがなかったと思う。また、文章の書き方として、2班のまとめで「、」「。」がない文章だったが、他の班との比較で気づいて欲しいと思っていた。
- (池端) 学びあいを意識したということであったが、お客さんになっている生徒がいなかったのが良かった。結論を文章にまとめる言語活動もできていた。まとめのプリントの最後に「以上の理由から。インドでICT産業が発展したと考える。」とあったことも良かった。発表したあと、その発表にアドバイスをしていた良かった。
- 資料の復習としてのスライドでは、生徒が自由に発言していて、まとめとしての教材は有効だった。自分も取り入れてみたい。
- 最後に、資料をつくるのに苦労したと思うが、どこから資料を取り寄せたか教えて欲しい。
- (柴田) 資料をつくるのが大変だった。今回のテーマでグラフや表などの資料を見つけることが困難だった。文字の資料が多くなってしまうと本校生徒は苦手で読み取れない。地図帳・教科書・資料集をコピーから出すようにしている。どうしてもないものはインターネットから検索して取り出した。今回の授業では資料づくりが、一番悩んだところであった。

＜教育専門監（八柳英子先生）の講評＞

十和田高校は今日で3回目になる。9月に柴田先生の授業を参観し、10月に模擬授業を行い、そして本日の授業研究会となった。

まず、授業に関してよかったところ2点について話をする。

1つは、柴田先生自身がチャレンジをしているところが素晴らしい。授業の方法として、ジグソー法で生徒を動かすという授業方法へのチャレンジが素晴らしいと感じた。ジグソー法は資料作りが大変で、みる資料によって生徒の思考がかわるため、身につけさせたい力が決まらないと資料ができない。資料はいろいろ扱ったが、中学校の教科書・資料集が分かりやすいと感じている。専門書からの資料に、中学校の資料集などを混ぜて使っている。

また、チャレンジの2つ目としてICTの活用も良かった。地理は世界の実際を見せる科目であり、写真や映像があれば毎時間でもみせるようにしている。今回は生徒の文章をスマホでとって写していた。

さらに生徒の取り組みが素晴らしかった。9月は一斉授業であったが、このクラスは活発な生徒が何人かいて、それらの生徒との受け答えで授業が進んでいた。今日はその生徒だけでなく、全員が活動している状態で、お客さんがいないということが良かった。また、生徒自体の話の内容を聞いていても、以前に比べて生徒の考える力が伸びていると感じた。単語で答えず、文章で答えることができていた。

改善するとさらに良くなる場所として2点について

伝え方について。前時のことを紙にまとめていたこともあり、紙にまとめると生徒は紙しか見ない。書いたことをただ伝えるだけの活動で終わってしまう。せめて、他の生徒に伝えるときに資料を見ながら説明すると、なお良いと思った。

2点目として最後のまとめのところでどちらがいかという結論がなくてもよい。ただ今回A～Cの資料の復習をしていたが、それはいるか、いないか。資料のフォローで知識は定着すると思われるが、それはいるか、いないか。資料に載っていない数字の補足は必要だと思うが、そのフォローはいるか、いないか、学校事情によるところであるが、今回の授業で感じたことである。

新しい学習指導要領が高校では2022年度から始まる。新しい指導要領では、これまでの授業をしながら、生徒が「何ができるようになるか」が重視されるようになる。高校の授業は「教師主導の講義形式の授業」の割合が小学校や中学校に比べて多い。進度などいろいろな理由が背景にある。一斉授業がダメというよりも教師自身が引き出しを増やすことが必要。単元によって使い分けると、生徒の可能性は広がる。新学習指導要領は、そのことが投げかけられている。

地理は、持っている知識をいかに深めていくかという科目。そのため発問も構造化していくことになる。意識して発問も構造化していくと深まる。また、授業方法もいろいろある。たくさん引き出しをもっていると教師自身も楽しめる。外部団体の実践例として、開発教育協会（DEAR）は授業方法の本などを提示しているところである。国際協力機構（JICA）も授業方法の紹介や教師向けの研修も行っている。私も今年、タンザニアで海外研修を行った。秋田県の人とはなかなか外に出てくれないという話もあるので、これらの研修機会があれば大いに活用して欲しい。

最後に、生徒が主体的に学びに向かうために、自分自身が気をつけていることを5つあげる。1は何のために学ぶかを知っている、2は勉強方法を知っている、3は自分がどこまでやれば良いかを知っている、4は「できる」という感覚を持たせる、5は「おもしろい」という感覚を持たせる、である。私たち自身、その教科が楽しいと思ってやっているのだから、面白いや楽しい部分を生徒に伝えるように授業をして欲しい。

研究テーマ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
～分かる、深く考える授業を目指して～

＜授業参観・研究協議の観点＞

学び合いを意識した言語活動について

公開授業研究会の研究協議Ⅱの記録（１班）

効果的だった実践例

- ・何を学習するのかなど授業の目的の明確化
- ・役割分担（生徒１人１人に役割を与える）
- ・音楽グループによる実技課題
→吹奏楽部や音楽が得意な生徒を各グループに分けるなどの配慮
- ・国語伝え合う力を育てることを目標にしている
→ワールドカフェ、KP法を取り入れている

言語活動を行う上での課題

- ・何を学習しているのか、今何の作業をしているのか分からない生徒がいる。
- ・自分の考えや意見を言えない生徒が多くいる。
- ・自分の考えを言葉で説明することができない。
- ・発問は常に悩み続けている。

課題をふまえての改善点

- ・効果的な発問の工夫や精選が必要である。
- ・授業の流れを見える化する。
- ・説明する型（話型）を準備する。（スモールステップ）

公開授業研究会の研究協議Ⅱの記録（２班）

効果的だった実践例

- ・少人数でのグループ活動（消極性の解消）
- ・正答を探す活動→誤りを探す活動への転換
- ・あえて男子だけのグループ、女子だけのグループ等をつくり、目の付け所の違いに気づく
実践例：無人島に１０個だけ何かを持って行けるとしたら何を持って行くか。
- ・想定外の意見が出てきた際の対応の仕方。そこから話題を拡げ、考えを深める。

言語活動を行う上での課題

- ・グループ編成（生徒観の関係、人数など）
- ・興味を引くための授業構成
- ・思考の幅をいかにして拡げるか

課題をふまえての改善点

- ・生徒たちが発言しやすい環境づくり
- ・時間設定について、長すぎず、短すぎない程度を見極める
- ・単元や単位時間の始めと終わりに同じ発問をすることで嗜好の変化を感じる。
- ・知識、理解の定着に繋がるような振り返りの時間

公開授業研究会の研究協議Ⅱの記録（3班）

効果的だった実践例

具体例として挙げたのは次のようなことである。

- ・練習問題で生徒が教えあう活動を行っている。
- ・グループごとにテーマを与え、ミニポスターやプレゼンを行う活動を行った。
- ・中学校の学び直し程度の問題を与えると、教えあう活動は活発になる。
- ・「問題練習＋ちょっと応用」くらいの演習問題を作ると、教えあいや解法を考える活動が活発になる。

言語活動を行う上での課題

- ・教科によっては対話中心になりにくいことがある。
- ・自分の考えを伝える力、聞く力をどのように身に付けさせるか課題がある。
- ・本格生徒として考えれば、集中力や基礎力が不足していて、満足な言語活動に達していない。
- ・自信のない生徒が多い。
- ・ブレインストーミングが苦手
→目に見えるものしか考えることができない、苦手である。（本校生徒の特徴）
→発想力がない。考えると思考が止まってしまう。

課題をふまえての改善点

- インプットとアウトプットは一体のものだから、インプットなしにアウトプットはできない。だからこそ、インプットの部分を育てることが必要である。
- 答え方や質問の仕方について、最初はテンプレートの形を与えて練習して慣れさせ、次の年からは枠をはずして、自分なりに答えるように段階を踏んで指導する。
（他校の例）質問力の向上：質問の仕方のテンプレートを持たせることで活発な質問ができるようになった。
- 指導する側が、根気強く指導することが必要。
- 生徒の頑張りを探して褒めることが必要。

公開授業研究会の研究協議Ⅱの記録（4班）

効果的だった実践例

- ・授業で扱う単位によって言語活動を活用できる度合いが違ってくる。それぞれの教科でどのような単位が学び合いの言語活動を効果的に実施できそうか話し合った。
→例えば、理科では化学反応式の単位における原子の個数計算や、波の重ね合わせの単位における図を用いて説明させる活動等
- ・講義式の授業においても、教員と生徒のやりとりの中で言語活動を重視することはできる。そのやりとりから、見ている側も学ぶことはあると考えられる。（1対1のやりとりを多用することで、生徒の集中力を持続させる効果もあった。）
- ・生徒に劇をつくらせた。（例）牛肉に関してオーストラリアと日本の関係を演劇で表現する。
- ・地理の授業で、実際に観光で行った際の実体験や写真を用いて授業する。

言語活動を行う上での課題

- ①多くの生徒の集中力が切れた状況では言語活動が上手く機能しない。
- ②事前に用意した資料等に沿った議論しかできず、予期せぬ方向に発展したり深まったりすることが少ない。→疑問点、素朴な疑問等をもっと効果的に拾うことが必要なのではないか。
- ③生徒が扱う言語の習熟度に大きな差があると、学び合いではなく、いつも同じ生徒が周りに教えるという構図になりがちである。
- ④その生徒の人に対する好き嫌いが、授業の中の学び合い活動にも大きく影響してしまう。
- ⑤グループワークなど、言語活動を重視した活動をする時には授業に対する自己評価が低くなることもあるので、気をつけたい。

課題をふまえての改善点

- ①授業の始めなど、早い時間帯に活動する場面を設ける。
授業の流れを提示すると同時に、生徒の活動を短い時間で区切って集中力を切らせない。
- ②公開授業の「まとめ」の場面であったように、「主な理由は以上のようなものですが、他にも理由が考えられます。何だと思う？」といったような発問に重きを置いた時間があっても良いかもしれない。疑問を出し合う時間を意図的に設定してみる。
- ③今回の公開授業でやったようなジグソー法を用いるなど、班の全員が役割と責任を負えば教える側と教えられる側の固定化はある程度解消できる。
- ④自分の好き嫌いで授業の中における人との接し方を決定してしまわぬよう、日頃の HR 活動等から周囲と分け隔てなく接するためのトレーニングを積ませるべきである。
- ⑤授業の終了時点で生徒自身がどのような状態になっていれば良いのかを明確に示しておくことで、妥当な自己評価を下すことができるのではないだろうか。

全体会

校長の講評

今回の公開授業研究会、いつも目にする生徒・職員だけでなく外部から参加してくれた先生方と一緒にすることができて良かったと思う。今回は「学びあいを意識した言語活動」がテーマである。研修Ⅱでは、自分の意見や考えを活発に発言しあっていて素晴らしかった。生徒たちの授業でも、このグループ活動のように生徒が動いてくれるとよいと感じた。高いレベルの生徒は本校には少ない。深く考えることができない、思っているも表現できない場合が多いが、生徒の良いところを取り出して活動することができれば良いと思う。

今回の授業が終わったあとの感想にも、集団の力を高める授業という話があった。授業をきいた生徒の「なぜ」を拾う。それを認めてあげると、授業参加に対する意欲が高まる。

例えば、今回の授業では、言語や賃金などの要素が重なっていたインドという話であったが、インドは良いがフィリピンはどうか、では台湾は？とか。日本で、同じ状況のもので何がよいか？など。生徒はいろいろな「なぜ」を持っているので、生徒のなぜを拾って評価することが大切である。

今回、このような研修会を行う機会を持つことができてよかった。年1回の研修ではもったいないくらいである。

第2学年 現代文B学習指導案

クラス 2年A組 生徒17名(男子4名、女子13名)
授業者 齊藤 恭子

現代詩『永訣の朝』を通して、鹿角の方言の魅力に気づくことができる。

- 1 単元 第1章 詩 永訣の朝
- 2 単元の目標 近代詩・現代詩に親しむ。
想像力を豊かにし、言語に対する感覚を磨く。
- 3 単元と生徒 明るく、活発に発言する生徒もいるものの、全体としては落ち着いた雰囲気の中で授業に臨むことができるクラスである。また、国語を得意としている生徒も多く、特に、小説などの登場人物の心情をとらえる場面では意欲的に取り組むことができる。
- 4 指導と評価の計画 (全4時間)
 - (1) 作者の、妹に対する思いをとらえる。… 第1時、第2時
 - (2) 方言に込められた作者の思いをとらえる。… 第3時
 - (3) 方言について理解する。… 第4時間(本時)

A 関心・意欲・態度	B 話す・聞く能力	E 知識・理解
方言について積極的に理解することができる。	学習後には日常会話の中でも鹿角の方言を用いながら話すことができる。	鹿角方言と花巻方言の類似点や相違点について理解する。

5 本時の計画

(1) 目標

岩手弁かるた遊びを通して、この地で育まれてきた「鹿角弁」の魅力味わう。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	・本時の目標を確認する。	・4～5人のグループをつくらせる。	・本時の目標を理解することができたか。 (A)
展開 40分	・「共通語」と「方言」の違いを確認する。 ・日本の中の「秋田県」、秋田県の中の「鹿角市」であることを確認する。 ・本文に出てきた「花巻方言」の意味について確認する。 ・グループごとに、集中して読み札を聞くことによって45枚の絵札をとりあう。	・具体例を挙げながら、共通語と方言の違いに気づかせる。 ・日本地図のワークシートを用いて、秋田県、鹿角市の場所を確認させる。また、岩手県の場所を確認させる。 ・「花巻方言」をもとに鹿角弁について考えさせる。 ・実際に岩手弁かるたを用いてかるたとりをしながら、鹿角弁以外の方言に触れさせる。	・前時までの内容を覚えているか。(A) 鹿角弁の魅力味わうことができたか。 (E)
まとめ 5分	・振り返りシートに記入する	・机間指導をしながら、「岩手弁かるた」の感想を聞く。	・自己評価ができたか。(A)

第3学年 日本史B学習指導案

1月20日(月) 5校時 3年A組教室 生徒18名(男子12名、女子6名)

使用教科書 詳説日本史B(山川出版社)

授業者 柴田果織

1 単元(題材) 第9章「近代国家の成立」 2 明治維新と富国強兵

- 2 単元と生徒 全体的におとなしく真面目である。積極的な発言はあまり見られないが、こちらからの質問に対してはしっかり考え、答えようとする姿勢が見られる。身近な地域の歴史から、日本の社会が大きく転換していく様子をとらえさせ、明治維新の意義について考えさせたい。

3 本時の計画

- (1)目標 ①明治新政府の成立過程を把握する。
②明治新政府の政策の意義について考える。

(2)展開

	学習内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	○毛馬内にある仁叟寺の境内に「戊辰戦歿之碑」があることを確認する 学習課題：なぜ毛馬内に「戊辰戦歿之碑」があるのか		
展開 40分	○戊辰戦争とは何か(原因、対立構造、経緯など)を理解する。 ○戊辰戦争の際、南部藩(鹿角地域も含む)が、隣の秋田藩と戦ったことを資料から読み取る。読み取った内容を発表。	・資料を読み取れているかを確認する。 ・生徒が発表した後、南部藩と秋田藩の関係を板書して確認させる。 ・戦後の秋田についても触れる	・資料を正確に読み取ることができる。
	○戊辰戦争によって近代国家形成の担い手が、薩長となったことを理解する。 ○明治新政府の政策について、理解する。 ○明治新政府の政策の意義について考えをまとめ、発表する。	・机間指導を行い、考えがまとめられているか、確認する。	・自分の考えをまとめているか。
まとめ 5分	・本時の内容について整理する。	・近代国家となるための条件は何かを考えさせ、次時の予告につなげる。	

第1学年 数学I学習指導案

2月12日(水) 1校時 1年B組教室 生徒22名(男子15名、女子7名)

使用教科書 新編数学I(啓林館)

授業者 飯塚俊介・寺田尚志

1 単元(題材) 第5章「データの分析」 第2節 データの相関 2. 散布図

2 単元と生徒 元気で活発な男子生徒が多く、集中力に欠ける場面も多々見られるクラスである。また、数学における学力差は大きく、数学を身近なものに感じることができない生徒も多い。このことから生徒にとって身近な題材であるスポーツテストの実際のデータを用いることで、散布図や相関係数の有用性について理解させたい。さらに、身近な題材を用いることで、ふるさと教育「かづの学」での活用につなげていきたい。

3 本時の計画

(1) 目標 散布図・相関係数から、データの相関関係を読み取ることができる。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	学習課題 4月に行ったスポーツテストの実際のデータ(*)から、データの相関関係について考える。	・2つのデータの関連性を調べるために「散布図」や「相関係数」が活用できることを生徒から引き出す。 ・配付したデータを黒板にも掲示し、本時の流れを説明する。	・話を聞くことができるか。
	データ(*)：1年生男子30名分の以下の資料 「身長」「体重」「座高」「握力」「反復横跳び」「シャトルラン」「50m走」「立ち幅跳び」「ハンドボール投げ」(体育科より)		
展開 35分	[グループ活動] ①どのデータで散布図・相関係数を考えるかグループで相談。 ②散布図を作成し、相関係数を計算する。 ③作成した資料について、自分達の考えをまとめる。 [全体活動] ④各グループで作成した散布図を掲示し、全員で見あう。その際、他のグループの散布図等に感想・意見を残す。(付箋) [グループ活動] ⑤最初のグループに戻り、活動のまとめを行う。	・予め、4～5人のグループを作っておく。 ・選択するデータが重ならないように机間巡視しながら調整する。 ・グループ内で役割分担させつつ、協力して作業を進めるよう声掛けする。 ・相関係数は電卓可とする。 ・各班の散布図をみて、散布図・相関係数から読み取れることを付箋で残すよう促す。 ・付箋に書かれた意見を踏まえて、文章化させる。	・協力して取り組んでいるか。 ・意欲的に取り組んでいるか。 ・授業に基づいて意見を述べているか。
整理 5分	散布図や相関係数の有用性について全体で確認する。	・グループでまとめたことをいくつか発表させる。	

保健体育科（体育）学習指導案

対 象：1年A組 男子15名・女子8名

指導者：石井 智子

1 単元名 陸上競技（長距離走）

2 単元の目標

- （1）技術の習得とともに、楽しみ方を理解し、生涯にわたって継続できるようにする。
- （2）自分の能力にあった目標記録を設定し、記録の向上や競走の楽しさや喜びを味わい、各種目特有の技能を身に付けることができる。
- （3）自主的に取り組むとともに、勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとする事、自己の責任を果たそうとすることなどや健康・安全を確保することができる。

3 指導と評価の計画

- （1）単元の指導計画（全8時間 本時：6／8時間目）
 - ・短距離走（6時間）・長距離走（2時間 本時2／2）
- （2）評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
陸上競技の学習に自主的に取もうとしている。 互いに助け合い教え合おうとしている。 健康・安全を確保している。	自己の課題に応じた運動の行い方の改善すべきポイントを見付けている。	短距離走では、中間走へのつなぎを滑らかにするなどして速く走ることができる。	陸上競技に関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。

4 本時の計画

- （1）ねらい クラスみんなでバトンをつなぎ松宮選手の記録に挑戦しよう。
- （2）展開（50分）（A 関心・意欲・態度 B 思考・判断 C 技能 D 知識・理解）

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 10分	1. 挨拶、健康観察		
	本時の目標：クラスみんなでバトンをつないで松宮選手の記録に挑戦しよう！		
	2. 準備運動を行う。 ・各自でストレッチ、予備運動を行う。	・スタート位置を確認しながら JOG と体操を組み合わせた準備運動を行う。	
展開 30分	3. 長距離走 ・記録に挑戦！	・自分がどれくらいのペースで走ると良いのか確認させる。 ・1人100mずつ走り、合計タイムで松宮選手の13分13秒を目指させる。 ・走っている途中にラップタイムを読み上げるなど、各自の目標に向かわせる。	・互いに助け合い教え合おうとしているか。 (A)
整理 10分	4. 整理運動 5. 本時のまとめ ・本時の振り返り。 ・次時の確認、挨拶。	・体調不良等がないか、主運動後の健康観察に努める。 ・合計タイムの確認、目標を達成できたか学習記録を使用し振り返られる。	・陸上競技を継続して楽しむための自己に適したかわり方を見付けているか (B)

第3学年 芸術科（クラフトデザイン）学習指導案
 1月8日（水）3校時 美術室 3年B組 生徒9名（男子1名、女子8名）
 授業者 中山 薫

- 1 題材 リンゴ・桃の花制作
- 2 題材の目標 鹿角の名産のリンゴや北限の桃は季節になると当たり前前に食してその形を見ているがそれらの花を知らない手にとって観察しながら、スーパーリアリズムを目指した写実的な立体作品をつくる。
- 3 題材と生徒 鹿角はリンゴや桃の栽培が盛んであり、生徒たちにとって、どちらも非常に身近な果物である。しかし、その花を間近で見えていないので、その美しさや色合いの変化などは見逃している。花を写実的に立体作品として表現させることで、それまで気がつかなかった身近なものの形の美しさや、色合いの変化などに気付かせ、表現する喜びを感じさせたい。

4 指導と評価の計画（全2時間）

1. 針金を花びら形にする 2. デップ液の膜を張る 3. 花の形に整える 4. 枝につける
5. 鑑賞

関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
リンゴや桃の花の形や色に興味を持ち、進んで制作しようとしている。	花の色や形をよく観察し、実物に近づけるよう努力している。葉も枝についていることを知る。	花（写真）と自分の作品を見比べ、形や色が写実的になるよう工夫して表現できる。	自分や友人の作品を鑑賞し、良さや美しさ、改善点などを見つけることができる。

5 本時の計画（1時間目）

- （1）ねらい 針金で花の形をつくる
- （2）展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	本時の目標：針金から桃の花をつくる ・題材の説明 ・本時の目標の確認 ・本時に使用する道具（新聞紙、針金 デップ液）の確認	・参考作品（完成品）を見せ、生徒の理解を助ける。 ・実際に針金で花の形をつくる様子を、途中まで見せる。	
展開 30分	・一本の針金を用いて花びらの形を作る。 ・花心を作る ・葉を作る ・作業が早い生徒には、枝の形を整えさせ、微調整ができる素材であるという実感を持たせる。	・針金の取り扱いに留意させる。 ・どの角度から見ても花に見えるよう、確認を促す。	【創造的な技能】 花卉をまとめて一つの花にできている。 →A 評価
片付け 10分	・作業途中の材料に記名し、提出する。 ・ゴミが散らからないように新聞紙で包んで片付ける。散らかり方がひどければ掃き掃除をする。 ・次時の説明（展示するためのアレンジを考える）を聞く。	・後片付けや掃除をしっかり行うよう確認し、声かけや指導を行う。 ・次時の説明を行う。	

第3学年 外国語（英語）学習指導案

令和元年5月13日(月) 6校時 3年A組教室 生徒18名(男子12名、女子6名)

使用教科書 Grove English Communication II (文英堂)

授業者 土門 祐子 Brooke Dalglish

1 単元名 Lesson 1 “Mt.Fuji : The Pride of Japan”

2 単元の目標

日本が世界に誇る富士山についての理解を深め、日本の文化と伝統を尊重し、世界の中の日本および日本文化について考えるよう促す。

3 単元と生徒

日本人の生活に深く根付いている富士山について、その歴史と、環境問題など、今後の課題を知るとともに、鹿角地域の文化や観光名所についても理解を深めてALTに紹介する機会としたい。英語学習に対して苦手意識を持っている生徒もいるが、授業に対する姿勢は良好で、前向きに英語学習に取り組んでいる。文法に対して苦手意識が強い生徒が多いが、音読や発音練習などには強い興味を示し、意欲的に取り組むことができる。

4 指導と評価の計画

Introduction (1時間) 内容読解 (6時間) プレゼンテーション (1時間:本時) まとめ (1時間)

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
グループワークに積極的に参加し、担当する文化や観光名所について相手に伝えようとする。	伝えたい内容を暗記し、正しい英文を用いて、相手に伝えることができる。	相手の説明を聞いて何を伝えたいか理解することができる。	聞いた内容について簡単な感想を述べたり、質問をするための表現を使うことができる。

5 本時の学習

(1) 目標 グループで協力し、鹿角地域の文化や観光名所を紹介することができる。

(2) 指導計画

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 15分	Warm-up ・世界の観光名所クイズに挑戦。 ・重要表現を確認する。	・英語が苦手な生徒も前向きに取り組めるような雰囲気作りをする。	
展開 30分	・本時の目標を提示する。 本時の目標：Let's introduce culture and tour spots of Kazuno to the ALT. Read & Run ・グループで担当する文化や観光名所について説明文を完成させる。 ・できた英文を暗記する。 ・他のグループと発表練習する。 ・グループ毎に担当する文化や名所についてプレゼンテーションする。 ・他のグループの発表の評価をする。	・机間指導し、支援が必要なグループに助言する。 ・机間指導し、支援が必要な生徒がいれば支援する。 ・発表しやすい雰囲気作りをする。 ・評価基準を確認する。	・グループでの自分の役割にきちんと取り組んでいるか[A] ・話す速度や声の大きさに注意しているか[B]
整理 5分	・自己評価シートを記入する。チームで協働できたか、プレゼンテーションの内容が理解できたかを評価する。	・ワークシートを提出するよう指示する。 [評価] 授業後にプリントを回収し評価する。	・情報を正しい英文で表現しているか[B]

第2学年 家庭科（課題研究）学習指導案

9月13日(金) 4校時 2年C組 調理室 生徒17名（男子3名、女子14名）

授業者 今川 浩子

本時の目標：〔ふるさと教育〕

秋田（鹿角）の食材を使用したアラカルト料理の調理と商品開発コンテストへの応募を通してふるさと秋田（鹿角）の料理の認識を深める。

- 1 単元 秋田（鹿角）の食材を使用したアラカルト料理の調理
- 2 単元の目標 秋田（鹿角）の食材を使用したアラカルト料理の調理を通して、ふるさと秋田（鹿角）の認識を深める。※指定材料はあきたこまち
- 3 単元と生徒 課題研究は体験型の学習が多く盛り込まれており、授業には意欲的に参加している。秋田（鹿角）の食材について認識を深めるため、アラカルト料理を各班ごとに調理することにした。
- 4 指導と評価の計画（4時間）
 1. 秋田（鹿角）の食材について知る（情報検索）
 2. 3 アラカルト料理の献立作成
 4. 秋田（鹿角）のアラカルト料理の調理（本時4／4）

関心・意欲・態度 [A]	思考・判断・表現 [B]	技能 [C]	知識・理解 [D]
秋田（鹿角）の食材に興味を持ち、それらに関する調査や実際に食している現状をふまえることで、郷土への関心を高めることができる。	秋田（鹿角）の食材や郷土料理について、効果的にまとめるために、深く考え、表現することができる。	秋田（鹿角）の食材を使用したアラカルト料理を考案し、調理することができる。	秋田（鹿角）の食材を知り、実際にアラカルト料理を考案、調理することで、改めて郷土について理解を深めることができる。

5 本時の計画

(1) ねらい

秋田（鹿角）の食材を使用したアラカルト料理の調理と商品開発コンテストへの応募を通してふるさと秋田（鹿角）の料理の認識を深める。今回の指定材料として、あきたこまちを使用することにする。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	・班ごとに準備した食材を料理にどう生かすか、調理作業の分担について確認し合う。	・これまで3時間学習してきた知識を踏まえて、安全に気を配りながら、調理をするように促す。	
展開 35分	・班ごとの料理のコンセプトや次の手順にふまえながら、時間内に作業を行う。 ①材料に切り方 ②食材の加熱時間 ③彩りと盛りつけ ④全班の料理の評価（鑑賞と試食） ⑤後片付け	・作業台に材料がきれいに置かれているか、全て揃っているかを確認する。 ・調理の手順を改めて確認するよう促す。 ・机間指導しながら、切り方や調理器具の扱い方、加熱の状況、彩りや盛りつけの工夫がなされているかを確認する。記録写真を撮る。	・秋田（鹿角）の食材が生かされたアラカルト料理になっているか[C]
振り返り 10分	・完成した自班の料理のコンセプトを記入し、評価をする。 応募用紙に必要項目を記入し、発送の準備をする。	・記入された評価用紙を回収し、事後に評価した後、返却することを伝える。 ・写真を撮り、応募用紙に添付する。	・アラカルト料理の調理を通して、郷土の食について認識を深めることができたか。 [D]

商 業 科（課題研究）学習指導案

日 時 令和元年 12 月 9 日（月） 9:00～ 9:50
 場 所 I T ルーム
 対 象 2 年 C 組 17 名（男子 3 名 女子 14 名）
 教科書 なし
 指導者 秋田県立十和田高等学校 工藤 由紀子

1. 単元名 テーマ研究

2. 単元の目標

ふるさと教育の発表を円滑に行うことができるように、プレゼンテーションの適切な方法を理解し、パワーポイントで発表作品を積極的に作成して作者の意図が伝わるように発表をする。

3. 評価規準

	A 関心・意欲・態度	B 思考・判断・表現	C 技 能	D 知識・理解
評 価 の 観 点	テーマの設定から発表・評価まで作品の制作に積極的に関わっているか。 実習記録の記入の有無、感想・今後の課題等の記述状況はどうか。 作品制作では、どのような工夫を行っているか。	作品のテーマは適切か。 ストーリーが練られているか。 計画的に制作を進めているか。 評価の視点に沿って相互評価ができているか。	プレゼンテーションでは、テーマ（作者の意図）がはっきり伝わるか。 ストーリーがしっかり構成されているか。 。文字の大きさ、配置など情報が伝わりやすく、デザインやレイアウトを工夫し、受信者を考慮した表現をしているか。	プレゼンテーションの概念を理解できているか。 評価やフィードバックが大切なことを理解できるか。

4. 指導計画（全 6 時間）

1. プレゼンテーションの方法
2. パワーポイントのスライド作成
3. テーマ研究の発表

1 時限(本時)

3 時限

2 時限

女子が活発に活動するクラスで、素直で積極的に授業に取り組む生徒が多い。相互に教え合う場面も見られるが、コンピュータの操作に苦手意識を持つ生徒もいる。

5. 本時の計画

(1) ねらい・目標

効率的に情報を伝えるためのプレゼンテーションの方法を学ばせ、適切にパワーポイントで表現するためのスライド作成の留意点を理解させる。

(2) 本時の学習過程（50分）

時 間	学習内容・活動	指導上の留意点・教師の支援	評価の観点・方法
導 入 5 分	テーマ研究の課題設定と内容説明…「自分史」を作成し発表(スライド6枚作成・作成上の条件提示)	ストーリーボードを配布し、次時までにスライド構成を考えてくることを指示する。	関心を持って聞いているか 〈A〉

展 開 40分	プレゼンテーションの方法 ・プレゼンテーションとは ・デジタルプレゼンテーションとアナログプレゼンテーションの違い ・パワーポイントのメリットとデメリット ・企画 ・提示方法の特徴 ・スライド作成の留意点 ・テンプレートの利用 ・リハーサルの必要性	・生徒の持つプレゼンテーションの概念を確認する。 ・考え方の修正および補充をする。 ・情報提示の仕方の違いを理解しているか。 ・パワーポイント作成上の留意点を示す。 ①デザインテンプレートは内容と一致したものを選ぶ！ ②文字入力はフォント・大きさ・色を工夫！ ③表やグラフで根拠を示す！ ④画像は内容に合っているか！ ⑤動画・音声の挿入はファイルの長さ・大きさに注意！ ⑥アニメーション・効果音は動きや音の意味を考えて使う！	プレゼンテーションの概念を理解できているか 〈D〉 プレゼンテーションの方法及びパワーポイント作成について関心を持っているか 〈A〉
まとめ 5分	振り返りシート記入	自己評価を忘れずに記入させる	意欲的に取り組んでいるか 〈A〉

編集後記

今年度はさらなる授業改善を目標に校内研修に励み、実りある公開授業研修会を開催することができました。教科の垣根を越えて、授業についての意見交換がなされるようになり、生徒の学力向上のために何ができるか常に考える体制ができつつあります。校外研修の必要性を感じ、積極的に参加したいという意識が高まった年になりました。

6年目となった“ふるさと教育”はすでに授業の中に根付き、年々授業内容に工夫がみられます。1年間の集大成となるこの研修集録が、皆様の今後の教育活動に御活用いただければ幸いです。

今回の研修集録作成にあたり、原稿依頼を快く引き受けてくださった先生方には改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

令和元年度 研修集録 第27号

発行日 令和2年3月17日
発 行 秋田県立十和田高等学校 研修担当
電話 0186-35-2062
FAX 0186-35-2272